



Title	意味の形成と構造について
Author(s)	西川, 盛雄
Citation	Osaka Literary Review. 1968, 7, p. 48-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25816
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

意味の形成と構造について

西 川 盛 雄

序

はじめに意味されるものがあつた。次にそれを象徴する記号が生れた。人間は集団生活に於る各人の役割遂行過程に於る *communication* の欲求と必要から一つの概念表出の手段として、人間独特の記号体系を作つていった。それが総称的な意味に於る言語なのである。

意味とは何か又は意味とは何でないか、という論述は各々の立場に於て甲論乙駁である。この小論は意味を考えていく上の私のささやかな試みであり意味するものと意味されるものとの相互関係を言語事実に基づいて考察していったものである。

意味とは人間の想像力、構想力の社会に於る言語的定着である。更にいえば、我々の意識の周囲の現実生活への働きかけの中から、その現実を切るべく語に於て我々の想像力（或は *image* といつていいかもしれない）を構想し、それが社会的に定着させたものが、即ち意味となつて *context* の語相互関係に於て実現されるものなのであるといえよう。

この観点に立つて *dynamic* な意味の形成と構造の姿を吟味、確認していつてみたいと思う。

(1) 意味形成の2つの側面

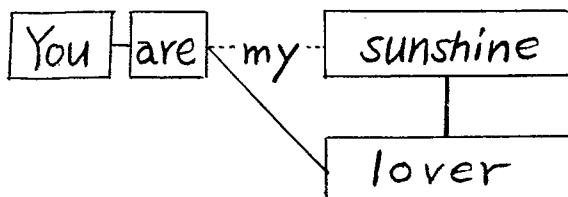
意味形成の根元には人間の想像力と構想力を考えなければならない。そしてそれは画一的でなく多様である。今“*dog*”の意味は何か？と問えば普通人は“*a domesticated carnivale*”〔ACD〕という意味に解答するだろう。lexical meaning としてはたしかにそうだが、今例えば“*He is a*

dog.”という context に於てはそうはいかない．ここでは “a despicable fellow” [ACD] の意味内容となって，そこに “dog” の意味の deviation が起るのである．ここでは as if ～; like ～ の働きが人間の意識内で起っているのである．従ってあくまでも語は文中に於てはじめて文構成要素として，他の語との有機的な結合関係に於て有意味的な存在として語の機能を全うする．従って本来的には，語の意味内容の多様性は一つの語自体をのみ捕えていても全体として明らかにされえないし，展望ある実り豊かな意味解釈は成されえないであろう．

“sunshine” の意味はふつうにいう「日光」であることはそれ自体正しい．しかし次の例に於てはどうなるだろうか．

You are my *sunshine*.

ここでは “sunshine” という語を「借りて」その内奥では，“you” との関係に於て，“lover” という意味が形成されているのである．つまり you に対する image が “sunshine” なる語によって context に於て定着され，言表に於て実現されたもののなのである．今これを隠喩的表現に於る意味として考え，Metaphorical Meaning としておこう．先の “dog” の場合もこの語と直結している “He” との関係に於て “He” の一つの image を Metaphorical Meaning として “dog” に於て定着したものであるといえよう．今これを図示すると次の様になる．



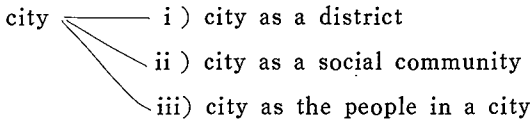
metaphor は従って，単に文体論としてよりもむしろ意味論の範疇に於て科学的に捕えていかなければならないのである．

さて次に下記の例ではどうだろう．

Next day it was the gossip of the suburbs: and the day after the city itself heard the story.

— G. Gissing; *Fate and Apothecary*

ここで“city”は動詞“heard”との関係に於ていかなる意味であろうか、結論からいえばここで3つの level 分けに於て解釈出来る。



そしてここでは具体的には iii) の意味である。この様に一つの語が相関語との関係に於てその語に直接関係ある事象を意味として象徴する場合、これを Symbolical Meaning ということが出来る。そしてここに於て i) を第1次象徴 ii) を第2次象徴 iii) を第3次象徴として level 分けすることが出来るのである。

一つの語の同一品詞に於る意味の多様性の源として2つの意味分化の姿を若干みたが一応ここで整理して対比すると次の様になる。

Metaphorical Meaning	Symbolical Meaning
1. deviation が顕著	1. deviation は小さい
2. image が具体的で鮮明	2. image が抽象的で不鮮明
3. level 分け無し	3. level 分け有り
4. 開放的で自由	4. 閉鎖的で不自由
5. 韻文的	5. 散文的

Metaphorical Meaning は具体的には、Metaphor の問題として F. L. Lucas の “a style without Metaphor and simile is to me like a day

without sun, or a woodland without birds.”〔Style〕ということばに基本的に賛同する立場で多くの研究が成されている。今は Symbolical Meaning にのみ焦点を当てて考えていってみたい。

(2) General Semantics と Symbolical Meaning

一般意味論者はよく知られている様に、A. Korzybski は Structural Differential, S.I. Hayakawa は Abstraction Ladder という風に意味把握に於る level 分けを試みている。両者による意味の level 的考察は、その限りに於て納得いくが、言語を扱かうまさにその時には、言語事実から遊離した思弁的観念性を暴露してしまう。意味研究の対象としての言語の実体を言語事実の中に見出していないからである。

具体的に述べていこう。

But the *White House* denied that this meant US troops would be casting aside …,

— *News Week*

ここで “White House” の Symbolical Meaning の Level 分けは次の様に考えることが出来る。

White House

- i) White House as the residence of U.S. President
- ii) White House as the office (=the body of persons occupying governmental office) of U.S. President
- iii) White House as U.S. President

さて “White House” はここに於て General Semantics ではいかに捕えられ、その欠陥はどこにあり、従ってどう考えねばならぬかを考察してみたいと思う。なお “White House” は複合語であるが、一つの固有名詞として一語と考えて今この論を進めていきたいと思う。

有名な Abstraction Ladder (以後便宜上 Levels of Abstraction

として考える)の概念は牝牛ベッシーを次の様に捕える。

- 1) 原子過程の level
- 2) 知覚過程の level
- 3) 語, ベッシーの level
- 4) 牝牛ベッシーの level
- 5) 家畜ベッシーの level
- 6) 農場資産ベッシーの level
- 7) 資産ベッシーの level
- 8) 富ベッシーの level

以上の8段階であるが、3)以上を言語の意味対象と考えられているのである。ここに於て1つの実在ベッシーが抽象化され、敷衍化されていく process を level 分けに於て捕え、意味規定を行っているのはたしかにうなづける。しかし言語事実との関係に於てはどうか。我々は例えば6)に於て、又は7)に於て、それらの level の意味内容としてベッシーなる語を用いることはない。ベッシーという語はあくまでも一つの固有名詞として、実在のある一匹の牝牛を象徴し、これを記号化しているにすぎないものである。Levels of Abstraction は従ってあくまでも語を(例えばベッシー)を個として、外側からみつめ、それを思弁的に段階分けしたものである。

さて同じ固有名詞, “White House” ではどうであろうか。これは実在の1つの「建造物」に与えられた固有名詞であるのにベッシーと変りはない。そこで S.I. Hayakawa 流に考えれば

- 1) White House の原子的過程の level
- 2) White House の知覚過程の level
- 3) 語, White House の level
- 4) 官邸 White House の level
- 5) 建造物 White House の level

6) 国有資産 White House の level

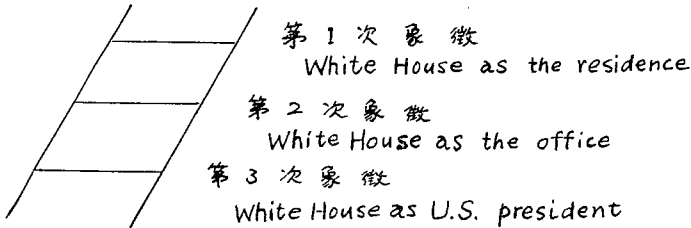
7) 資産 White House の level

8) 富 White House の level

と考えることが出来る。(この分け方は S. I. Hayakawa の考え方に出来るだけ忠実を守ったが、重要なことは彼にあっては分け方の内容の一つ一つではなく、その内包に於てより包括的な level で捕えていくことができるというそのことなのである。)

さてあくまでも語としての “White House” の意味は 3) の場合でのみ言語事実の中で実現されるのである。しかしその場合にしても、既に先に確認しておいた語の Symbolical Meaning の側面は全く捨象されてしまっているのである。次に実際の言語事実の中にみられるこの Symbolical Meaning の段階分けに於て意味構造の側面をみていこう。

語を全としてはいはゞ内側からみていくことによって、従来の A. Korzybski や S. I. Hayakawa らの言語事実から遊離した思弁的、形而上学的観点を今一応離れて、逆の違った方向から言語事実に立脚した意味の level 的考察を進めていくことが出来る。今、“White House” の側に於て i) White House as the residence of U.S. President ii) White House as the office (= the body of persons occupying governmental offices) of U.S. President iii) White House as U.S. President の3つの意味 level を各々第1次象徴、第2次象徴、第3次象徴と順次定めると、全体 Symbolical Meaning を level 分けに於て考えることが出来る。そしてこの全体概念を Levels of Symbol と考えたいと思う。図示すると次のようになる。



このような例は単に固有名詞に限ることなく、その数も多い。

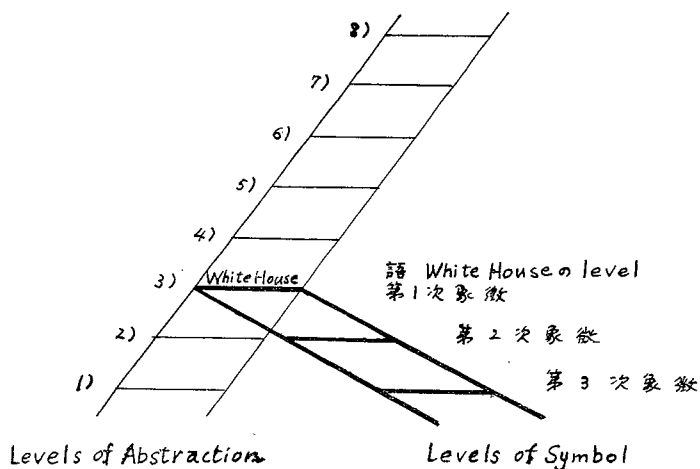
例えば、

The *village* slept: — the silence was broken only by the noise of a little brook, and by the faraway barking of peasant's dogs.

—L. Hearn; *Of a Promise Kept*

この例文に於て “village” は相関語 “slept” との関係に於て単に第 1 次象徴としての “village as a district” から第 2 次象徴としての “village as a social community” そして更に第 3 次象徴としての “village as the inhabitants collectively” へと敷衍され、意味の拡大が形成されているのである。

さて次に general semantics と Symbolical Meaning の現実的接点を具体的には、Levels of Abstraction と Levels of Symbol との意味解釈に於る相互補完性を述べねばならない。後者は前者を批判しつつ両者は密接に関係し合っている。いうなれば前者では、語を個として外からみた結果生じた思弁概念であるに反し、後者は、語を全とし、内からみた結果生じた現実概念であるからである。両者をかみ合わせればよりはっきりするであろう。



この両方のハシゴから考えれば、図の様に言語活動に於て語としてその内奥の意味が実現されるのは Levels of Abstraction に於ては 3) 語ベッシーの level であり、Levels of Symbol に於てはそこから出発して更に第2次、第3次の意味が内含されていくのである。ベッシーはあくまでも Levels of Symbol の立場からみれば第1次象徴のみをもつ固有物に対する一つの名称であるといえるのである。“White House”や“village”などは、context に於る相関語との関係に於て、ベッシーの固有性から更に進んで第2次、第3次の Symbolical Meaning を持つのである。Levels of Abstraction は 3) 語 level に於てのみ言語事実と触れ合う。そこは同時に Levels of Symbol との交叉点であり又その出発点であるのである。

(3) Symbolical Meaning

Levels of Symbol は一応3段階に分けて述べて来たが、詳しくはまだまだ吟味しなければならない。本筋からはずれぬ限り述べておきたいと思う。

まず第1, 第2, 第3の各 level の境界線をどこで引くか, ということである。

第1次象徴は原則的に「名称」であり, 辞書などが最初に取上げている意味である。いはゞ referential な Symbolical Meaning であり, その意味に於て transparent であるといえる。

第2次象徴は, 第1次象徴と密なる関係に於て多く「集合体」を示すものである。辞書などでは “a group of ~” “a body of ~” といった説明が成されているのである。そして全体として人間を包括的な community に於て捕えんとするものといえる。一度第1次象徴の cushion を経ているのですでに opaque になっているものである。

第3次象徴は「人間」が直接示される場合であって, せいぜい “a number of ~” という数詞句がつく位である。辞書などでも “a number of persons ~” や “inhabitants ~” という形で示されるものである。これも又 opaque である。

さて原則的に各 level の一般的特長を述べて来たが, 一つの語が必ずしも3つの level を持っているとは限らない。又それを list に採用していく辞書自身も後述する様に統一されていないのである。

(4) 単一性象徴と複合性象徴

今はしばらく第1と第3の Symbolical Meaning に着目してみたい。

The *red-cap* usually expects fifteen cents a bag for his services.

— T. Doty; *Tipping*

Hotels generally do make a service charge.

— T. Doty; *Tipping*

上例に於て compound noun “red-cap” はもとの意味を失って porter として「赤帽」の意味である。そして特定の人を単一的に象徴をし, それ

が意味として固定したのである。

一方後者の例で本来建造物がここでは敷衍されて “bureaux of hotels” 更に “managers of hotels” を示している。つまり “hotels” は文脈の中で第1次象徴の “a public house offering lodging …” [ACD] が捨象されて第3次象徴として複合的人間が象徴されているといわなければならない。前者の例を単一性象徴、後者の例を複合的象徴として分類することが出来よう。

(5) 固定性象徴と一般性象徴

Symbolical Meaning の多様性は又、文脈によってその意味する者が固定的になっている時にあらわれてくる時がある。

This, more than all its other charms, will, it is felt, make the volume precious in the eye of the earnest reader; and will lend additional weight to the lesson that the *story* teaches.

— J. Jerome; *Three men in a boat*

Restoration times saw the construction …

— C. T. Onions; *Advanced English Syntax*

上例で “story” は全体的文脈と相関語である “teach(es)” との関係に於て “the author of the story” を意味し、具体的に名前まで暗に固定されてくるのである。ここでは Jerome その人であるといった具合である。

下例では “time(s)” は先の複合性象徴と同様に一般的に「人々」を意味し、そこからは特定の人間が浮彫りにされるということはないのである。あくまでも第1次象徴を踏えたその「時代」の人々を意味するものである。ここに於て前者を固定性象徴、後者を一般性象徴と分けて考えねばならぬと思われる。

意味の何たるかを考えるのに、Symbolical Meaning として、語の connotation の拡がりを level 分けに於て捕えてきた。意味は学者によって、Sense-Reference, Meaning-Thing-meant 更には Connotation-Denotation の対立関係に於て捕えられてきている。結局、客観的な事象と、そこからくる人間の意識内容の Symbol 形態との緊張関係の全多様性が意味といえるのである。山内得立氏が「意味は事物の何たるかを規定するものであるが、その何であるかを措定するのではない、たゞその何ものかであることを規定するのである。」「意味の形而上学」と言っておられる内に意味追求の深みを思わざるを得ないのである。しかしその「深み」は Mysticism の詭弁をいうものではけっしてない。又深淵なる常識論、形式論といった退屈なものではましてないのである。

次に Symbolical Meaning の諸相が辞書との関係に於てはどうなっているかをみていかなければならない。Symbolical Meaning の辞書との関係に於る一つの問題提起をする中で更に意味を考えていこうと思う。

我々は普通には辞書はたゞ習慣的に用途と好みに応じて日常用いていることが多いが、いかなる規準をもって、いかなる立場に立って無限の言語の事实现象を有限な書物の中に収めるのか、我々はこういったことに日常疑問を抱かずに辞書を片手に研究をしているとしたら極めて危険なことといわなければならない。

既に “city” と “village” 等について、各々の Levels of Symbol は述べた。しかしこれと同種の語、“suburb” について今考えてみる。

Another month and the flowery bowery little suburb know him no more.

— G. Gissing; *Fate and the Apothecary*

この例に於て “suburb” は “know” との関係に於て第3次象徴の “inhabitants in the suburb” を意味内容としている。この限りに於て “city” や “village” と同様である。さて今最寄の辞書（各々最近のもの）の内

OED, UED, WED, ACD, 新英和の5つを調べてみると“suburb”の項には“inhabitants in the suburb”又はそれを示唆する意味は載っていない。単に「必要が無いから」とか「頻度数の為だ」といった常識論ではその底にある大きな問題を見失ってしまうのである。ところが“city”や“village”は第3次象徴まで、そうでなければ少く共第2次象徴までは記載されており、且つ3つの語は同種の語である限り、ここに新に言語事実と辞書との関係の問題が提起されて来なければならぬと思うのである。

辞書は我々の言語研究の成果の一つである。又辞書は客観的な無限の言語事実を、その語整理の規準としての公益性に於て、又用途の実際的な便宜性に於て、更に又民族国家の文化の歴史を踏えた民族性、国民性に於て簡潔に且つ厳密に語整理を行うものであるといえよう。

今再び“suburb”を考えてみると、各辞書は次の様に説明している。

OED では

“the country lying immediately outside a town or city.”

NED では

“part of town lying on its outskirts”

WED では

“an outlying part of a city or town”

ACD では

“a district lying immediately outside a city or town”

新英和では

「郊外, 市外」

そしていづれの場合も第3次象徴の意味には触れていない。ここに Symbolical Meaning をめぐる無限の言語事実と有限の辞書との間の矛盾としての gap が浮彫りにされてくるのである。

さて私は問題を更に敷衍させて多くの実例を示さなければならない。

(7) Symbolical Meaning と辞書 -2-

Levels of Symbol は今まで述べて来たように “suburb” をめぐる場所や地域を示す語に限るわけでは更々はない。場所や地域を始めとして、建造物、時代、組織集団、会合、抽象名詞、定期刊行物や出版物等々を第1次的に意味する語が各々の context の中で Symbolical Meaning を形成しているのである。ここでは煩を避ける為に結果のみ記して一つ一つの言語事実、出典は省かせていたゞきたいと思う。そして各辞書は ACD を除いては在学校の合同研究室のものを使用したものである。実例については、第3次象徴の意味内容に用いられている語の内25個を選び出し、各々辞書に当たったものである。

- ……… 第3次象徴まで記載
 △ ……… 第2次象徴まで記載
 × ……… 第1次象徴のみ記載
 φ ……… 辞書に記載されていない

	OED	UED	WED	ACD	新英和
1 city	△	×	○	○	○
2 village	○	×	○	○	○
3 suburb	×	×	×	×	×
4 hotel	×	×	×	×	×
5 school	○	○	○	×	×
6 postoffice	×	×	○	×	×
7 White House	φ	×	×	△	△
8 Kremlin	×	×	△	×	△
9 time(s)	○	×	○	×	×

	OED	UED	WED	ACD	新英和
10 department	×	×	×	×	×
11 government	△	○	○	△	△
12 organization	△	○	○	○	△
13 company	○	○	○	○	○
14 country	○	×	○	○	○
15 meeting	△	○	×	○	○
16 council	△	△	△	△	△
17 gentility	○	×	○	×	×
18 nobility	△	○	△	△	○
19 press	△	×	×	○	○
20 population	×	×	○	△	○
21 magazine	×	×	×	×	×
22 language	△	×	×	×	×
23 world	○	○	○	○	○
24 Peking	×	×	×	×	×
25 Wall Street	∅	×	△	○	△

僅か25の例からだけでもこの表は種々のことを教えてくれる。 Levels of Symbol が各々の level に於て各々の辞書にいか採用されているか、一つの語をめぐる辞書相互間の問題等々、 Symbolical Meaning と辞書との関係の実体は更に深いものがあるといえよう。それは又今後の課題でもある。

さて次に上で得た結果を種々にまとめてみようと思う。

1) 第3次象徴と辞書（○の数）

	○ の 数	全体25個の内	平 均
OED	7	28 %	28 %
UED	7	28 %	
WED	12	48 %	42 %
ACD	9	36 %	
新英和	9	36 %	36 %

2) 第1次象徴と辞書（×の数）

	× の 数	全体25個の内	平 均
OED	8 + ₂	40 %	54 %
UED	17	68 %	
WED	9	36 %	40 %
ACD	11	44 %	
新英和	10	40 %	40 %

(+₂ は φ の数)

1) の表と 2) の表の結果から、その平均値をみるとアメリカ系の辞書とイギリス系の辞書の特長が統計的に明確に示されていることは面白いと

同時に重要な事実というべきであろう。常識的にいわれているが、アメリカ系は進歩的、イギリス系は保守的ということばの裏付けとしてこの表は何らかの役に立ちはしないだろうか。その数値の差異も思いのほか大きいものである。又同じアメリカ系でも WED と ACD, イギリス系でも OED と UED はずい分の差がある。又代表的な辞書とされる OED と WED とは語採用の姿勢としてずい分の差があるといわなければならない。各辞書の相互関係を両図にみていく時各々の一般的傾向が示唆されているといえるのである。日本の辞書は英米両国の良い所からとったのであろう。又個々の辞書については ACD に近い傾向にあるといえよう。たったこれだけの例からの推論は危険ではあるが、これらの結果は辞書の基本的態度を考える上での一つの客観的資料といえよう。(別に50個の例にして同様の操作をしてみた結果、ほとんど同じ結果を得たことは驚くべきことではあった。)

(8) 意味の形成と構造の一側面

Symbolical Meaning の level 分けの概念を吟味していく中で、我々は一つの語をいかにその場に應じて多様に用いているかがわかり、いかに日常の生活に密着しているか、思い知らされた。辞書の比較にまで及んでしまった今、問題を改めてはじめに帰って意味の何たるかにしぼって考えてみたいと思う。

はじめに意味されるものがあった。次にそれを象徴する記号が生れた。と最初に言った。その記号としての語を生み出した根元に人間の想像力、構想力が働いているのである。そしてそれは人間の意識概念の客観化としての言語発語に於て実現されるのである。Symbolical Meaning の Levels of Symbol は人間の想像力、構想力の言語的定着の段階を示しているものなのである。

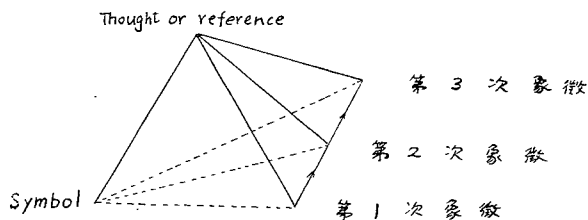
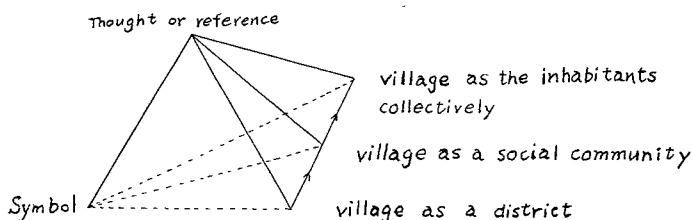
想像力、構想力は人間の意識の緊張であり、言語によって客観化されて

はじめて意味が生じてくる。言語とは個人の言表によって実現される限り結局は個人的なものである。従って意味も又原初的には個人のものである。しかし個人は集団の中にいる限り、個人の意味は即、集団の意味となって無意識的社会通念として人々の脳裏に行きわたるのである。そして今度は逆に社会集団の意味が個人の意識に作用するといった不断の二律背反の相互関係があるのである。

E. Cassirer が「人間を *animal rationale* と定義する代りに *animal symbolicum* と定義したい」〔人間〕という時、又、「言語はその本性及び本質上、比喩的である。」〔同書〕という時、彼は人間を言語表現の動物であると考えているのである。実にこの「表現」こそ人間のパトスとロゴスの矛盾の言語的实践としての言表なのである。これはまさに三木清の言葉を借りれば、「客観的なものと主観的なもの、含理的なものと非合理的なもの、知的なものと感情的なものをいかにして結合しえるか」〔構想力の論理〕という問題にかゝっているのである。そして更にいえば、このロゴスとパトスを人間の意識内で統合させる緊張に於て *image* が生じ *Metaphorical Meaning* も形成され、人間の言語による象徴能力が発揮されてくるのである。この様に言語の象徴性は人間存在の究極に連なる問題であるのである。

Ogden-Richards の有名な三角形の図式は固定的に考えない時には意味形成の有様を図示したものとして今なおすぐれて説得力のあるものである。その根本的考えは、記号 (Symbol) は事象 (Referent) とは直接何の関係もない。たゞ思考 (Thought or Reference) を介して両者が結びつけられている、という点にある。さてここで今迄考察して来た *Levels of Symbol* はどう位置づけられるであろうか。既に “White House” を始めとして “hotel”, “city”, “village” 等々に於て、一つの語にいくつかの内へ向う level 分けをみた。そしてそれら level の各々は実在として象徴されている以上、次の様に図示することが出来るのである。village

の例では、



(9) 終りに、

意味は常に何ものかについての意味である。その意味は語の発話に於て実現される。しかし一方、語そのものの自体では何物でもなく他の相關語との関係に於て始めて生きた語となり、そこに dynamic な意味の諸相が実現される。意味とは更にいうならば、人間の想像力、構想力の言語的定着であり、又意識の言語による社会的定着であり、集団生活に於る相互協力と分業の役割遂行の為に communication の必要と欲求からその手段として用いられていくものなのである。従って意味自体も歴史の流動性の中で、社会の動きの中で常に動いており、やがてはすたれ他の新しい人々の要求にあったものにとってかわられていくのである。又同一語の意味内容も shift していくのである。その具体的な姿は Metaphorical Meaning 更に Symbolical Meaning の更に深い考察によって少しでも明らかになるのではなかろうかと思うのである。意味研究の対象が空理空論の実体の

ないものならば、語と事象の形式的な対立としてのみみるならば、そして意味研究の中に生きた日常生活を営んでいる人間の意識が捨象されているならば、それはも早健全な人間を考える人間存在の学問ではなくなってしまふ。言語事実に立脚して意味研究の一端として Symbolical Meaning を Levels of Symbol という概念構成に於て言語の意味内容の側面の諸相を、或は General Semantics を批判しつゝそれとの相互関係を吟味し、或は辞書との関係に於て捕えていって見たのがこの小論なのである。

更にここでは Symbolical Meaning の側面に焦点を当てて意味を考えてきたものであって、私は次に Metaphorical Meaning, 更に広く転意法について考えていかなければならない。

使用辞書

- O E D The Oxford English Dictionary
1961年版
- U E D The Universal English Dictionary
1960年版
- W E D Webster's New International Dictionary
1961年版
- A C D The American College Dictionary
1962年版
- 新英和 New English-Japanese Dictionary
1960年版